

報告番号	甲 乙 第 号	氏 名	志賀 俊介
<p>主 論 文 題 名 : Living in the Middle of Nowhere: Ontological Ambivalence in Jhumpa Lahiri's Works (脱領域の文学——ジュンパ・ラヒリの作品における存在論的二律背反)</p>			
<p>(内容の要旨)</p> <p>1980年代以降、Emory Elliott 責任編集による <i>Columbia Literary History of the United States</i> (1988) に代表されるように、1920年代以来定説とされていた植民地時代のピューリタン文学をその端緒とし、ヨーロッパ系白人男性作家を中心に形成されたアメリカ文学史の見直しが積極的になされるようになった。それにより、ピューリタン文学の影に隠れていたネイティヴ・アメリカンによる文学に光が当てられ、アメリカ文学が潜在的にもつ人種的多様性が明らかになっただけでなく、女性作家やアヴァンギャルド作家の再発見が行われたのである。</p> <p>アメリカ文学における多様性の再発見に繋がった事象として、1960年代以降の移民の動きは無視することができない。特に、1965年の移民国籍法（ハート＝セラ法）は、従来の国籍により移民の受け入れ数を決定する割当制度を撤廃したという点において、きわめて重要である。中国人女性移民の数を抑えるために制定され、アメリカ合衆国史上初めての移民制限法として知られる1875年のペイジ法以来、1882年の中国人排斥法、1917年の排日移民法、そして初めて移民割当制度を採用した1924年の移民法に見られるように、アメリカにおける移民法の変遷は、国内における人種的多様性という点において大きな影響を与えてきたと言ってよい。東半球の各国に等しく一年あたり二万を割り当てた上で最大十七万人、西半球からは最大十二万人の移民を受け入れることを可能にした1965年の移民法は、後の文学史の見直しに繋がるアメリカにおける人種の様相を大きく変えた要因として考えられる。</p> <p>1965年以降、その数を大きく増やしたアジア系移民の中でも、当時の冷戦期の状況を考えるならばインド系移民作家の特異性は注目に値する。なぜなら、アメリカ政府はソヴィエトとの激しい技術開発競争において優位に立つべく、科学分野での優秀な人材を取り込むべくインドからの移民を積極的に受け入れたからである。他のアジア系移民の多くが低賃金労働に従事していたのに対し、インド系移民は高度な専門職や研究職に就いていたという点で、状況を大きく異にする。</p> <p>インド系移民を論ずるにあたって、1600年の東インド会社の設立に始まり、1858年から1947年まで続いたイギリス政府における植民地政策について考察することを避けて通ることはできない。インドのエリート層は、イギリス政府主導による英語教育の恩恵</p>			

を受けたことが、後にアメリカへの移住など国境を越える自由を得ることができた。一方で、その植民地政策は、自由主義の仮面に隠れた欺瞞をも含んでいたことは Gauri Viswanathan が *Masks of Conquest* (1989) で詳しく論じているとおりである。

英語教育の影を色濃く残す中、インド文学は発展を遂げた。インド人作家による初の英語文学とされる *Rajmohan's Wife* (1864) をイギリス統治時代に執筆した Bankim Chandra に始まり、アジアで初めてノーベル文学賞を受賞し、イギリスの詩人 W. B. Yeats も絶賛したことで知られる Rabindranath Tagore など、英語で執筆されたインド文学は宗主国であるイギリス本国の文化にも影響を及ぼしたのである。

そして 1965 年にアメリカで新たな移民法が成立し多くのインド人が海を渡ると、その文学はアメリカの地で花開くことになった。その筆頭格は Bharati Mukherjee (1940—2017) だろう。彼女はアイオワ大学で開かれたクリエイティブ・ライティングのワークショップに参加するためにアメリカへ渡り、その後、インド系アメリカ文学を語る上で欠かせない作家となった。

Mukherjee がインド系移民の第一世代を代表する作家であるとすれば、その次の世代のインド系アメリカ人作家でアメリカ文学史上に最も影響力を及ぼしているのは Jhumpa Lahiri (1967—) であろう。ベンガル人の両親のもとにロンドンで生まれ、幼少期にアメリカへ渡った経験を持つ Lahiri は、第一世代と第二世代のどちらにも属することのない、いわゆる 1.5 世代の移民である。ピューリッツァー賞を受賞した最初の短編集 *Interpreter of Maladies* (1999) 以来、彼女の作品はアメリカ文学に大きなインパクトを残してきた。大学における英文科の教科書の定番と言える *The Norton Anthology of American Literature* に 2007 年の第七版以降、短編小説 “Sexy” が収録され続け、彼女の作品に関する初の研究本 *Naming Jhumpa Lahiri* (2012) が出版されたことが示しているように、一般読者間の人気のみならず、学術的な関心も非常に高い。

Lahiri が描くのは、中産階級に属し生活に苦勞はせずとも、アメリカとインドのどちらにも根を下ろすことのできない葛藤を抱くインド系アメリカ人の姿である。先行研究は、Lahiri の作品のインド系ディアスポラの根の在り方について、Homi K. Bhabha や Gayatri Chakravorty Spivak と行った優れたインド系知識人によるポストコロニアル理論を取り入れながら、環大西洋的・環太平洋的視点から考察している。

本博士号請求論文は、上記のポストコロニアル理論や環大西洋・環太平洋研究を踏まえつつ、Lahiri 作品に頻出する “nowhere” や “nothing” とした存在と不在の両価性を示唆する言葉に着目する。その上で、存在論的二律背反を示唆する「虚無の空間 (nowhere space)」で宙吊り状態となったインド系ディアスポラが持つ新たな地平へと向けられる眼差しを明らかにする。序章では、*Interpreter of Maladies* 収録の短編、“The Third and the Final Continent” に触れながら、新たな土地への渴望こそがアメリカン・スピリットの根源にあることを論ずる。

第一章は Lahiri の初の長編小説 *The Namesake* (2003) について考察する。作品は 1965 年の移民

法後にアメリカのマサチューセッツ州へ渡ったインド系移民の一家を中心に展開する。主人公は 1968 年に生まれ、ロシアの作家 Nikolai Gogol にちなんで名づけられた Gogol Ganguli であり、その名前によってアメリカ社会に馴染むことのできない葛藤が描かれている。Lahiri 自身が 1967 年生まれであることを考えれば、Gogol は彼女自身の人生を映し出したものであると考えられるだろう。しかしながら、本章では 1.5 世代という世代の狭間にある Lahiri による第二世代のみならず第一世代にも向けられた眼差しに着目し、主人公だけでなく、彼の親である Ashoke と Ashima もまた根無し草となった苦しみを抱いていることを指摘する。彼らはカルカッタが故郷であるにもかかわらず、アメリカへ移民として渡った以来、もはやかつての故郷は過去と同じように彼らを受け入れてはくれない事実を突きつけられる。特に、物語最後に妻である Ashima が下した結論は興味深い。子供が独立し、夫の Ashoke が亡くなった後、彼女は一年のうち半年をカルカッタで過ごし、残りをマサチューセッツで送ることにするのだ。この例に見られるように、Lahiri は Ganguli 一家が根無し草であることを示すために飛行機や電車の移動を繰り返し描いていることは注目に値する。この繰り返される移動によって、存在と不在の存在論的境界を曖昧にする虚無の空間が生み出されるからである。また、存在論的な曖昧さに着目することで、リアリズム作家として評されることの多い Lahiri の新たな側面にも光をあてることを目指す。

さらには、作中に言及され、父 Ashoke に大きな影響を与えた Nikolai Gogol の “The Overcoat” (1842) の重要性についても論ずる。若き日の Ashoke に多大な影響を与えたこのロシア文学の古典作品は、存在と不在、あるいは現実と非現実の境界の曖昧性を示唆する作品として、*The Namesake* の骨子であると言ってよい。

“The Overcoat” と並び、Lahiri が作中で言及しながらも、その重要性が十分に議論されていないのが 1960 年代の大衆音楽である。十代の Gogol Ganguli が熱心に聴く The Beatles を始め、Bob Dylan や Eric Clapton と言った音楽は、当時のインドを巡る社会状況を暗に伝えるだけでなく、インドとアメリカの環太平洋的な文化伝達を考察する上で示唆に富んでいる。つまり、1960 年代にインド文化の影響を受けながら隆盛したサイケデリック音楽は、アメリカにおけるインド文化の受容の在り方を示し、それは Lahiri らインド系移民にさえ大きな影響を与えたことが *The Namesake* に現れるインドの風景からうかがい知ることができるのである。

第二章では、Lahiri の短編集第二作 *Unaccustomed Earth* (2008) のうち、後半部分をなす中編小説 “Hema and Kaushik” を取り上げる。Lahiri は Nathaniel Hawthorne によるアメリカ文学の古典、*The Scarlet Letter* (1850) の序論である “The Custom- House” として引

用し、タイトルである *Unaccustomed Earth* もその一節によるものである。Lahiri の Hawthorne への意識に注目した先行研究は、この引用を、アメリカ文学の伝統の中に自身を組み込む試みの表れであるとしている。しかしながら、これらの先行研究が *The Scarlet Letter* が持つ感傷主義的側面が Lahiri の作品に及ぼした影響について十分に論じているとは考え難い。Hawthorne は彼の同時代である 19 世紀の感傷小説作家を痛烈に批判したことで知られている。しかし、彼はアメリカの感傷小説の源流であるイギリスの感傷小説に親しんでおり、姦通のプロットなど *The Scarlet Letter* にもその影響は色濃く反映されている。

本章では幼馴染であり後に恋人となる Hema と Kaushik の関係に Hawthorne を含む 19 世紀感傷小説の伝統が見出されることを明らかにする。特に、Kaushik の母の死がもたらす感傷が後に大人となった Hema と Kaushik のシンパシーを生じさせ、恋愛関係へと発展させる。Hema が他の男性との結婚を控えていながら Kaushik と関係を持ったことは、Lahiri の Hawthorne からの影響を考慮すれば、*The Scarlet Letter* における Hester Prynne と Arthur Dimmesdale の姦通を想起させる。

しかしながら、Lahiri は単に 21 世紀版の感傷小説を生み出したのでない。ここでも物語を読み込む鍵となるのは彼女が言及する 1960 年代の大衆音楽である。物語の序盤で触れられる The Rolling Stones の *Let It Bleed* (1969) は、作中におけるシンパシーや溢れ出す感傷の客観的相関物としての自然災害を示唆する意味において、きわめて重要である。さらに、Jimi Hendrix への言及は、個人の感情とアメリカのインド系移民の人種的アイデンティティの橋渡しをする点で、見逃すことができない。なぜなら、Hendrix は黒人ミュージシャンであるとされながら、実際にはネイティブ・アメリカンなど多様な人種的背景を持ち、黒人と白人という二項対立的な人種の枠組みの中で翻弄されていたからである。それは、白人優位のアメリカ社会において、白人に近いモデル・マイノリティとして認知されながら、白人にも黒人にも帰属意識を感じられることのないインド系移民の姿と重なる。このとき、“Hema and Kaushik” は個人の感情をめぐる感傷小説としてだけでなく、白人と黒人の間に宙吊りとなったインド系移民の人種的アイデンティティを表象する物語となるのである。

第三章は、Lahiri の二作目の長編 *The Lowland* (2013) を分析する。*Unaccustomed Earth* で垣間見られる *The Scarlet Letter* からの影響は、本作にこそ深く刻み込まれていると言ってよいだろう。インド系アメリカ人作家の Hawthorne への意識という点では、Mukherjee の名を忘れるわけにはいかない。彼女はピューリタン時代のアメリカが貿易を通してインドと交流しており、さらには“The Custom-House”で Hawthorne の故郷であるセーラムとインドとの関係が示唆されているにもかかわらず、*The Scarlet Letter* の本編

ではネイティブ・アメリカンを指して“Indian” という語が繰り返し使われ、インドの存在が黙殺されていることに強い不満を明らかにしている。そこで、彼女がピューリタン時代に舞台を設定し、ムガル帝国期のインドまで組み込んだ物語として創作したのが *The Holder of the World* (1993) である。Sacvan Bercovitch は *The Office of the Scarlet Letter* (2013) の中で、*The Scarlet Letter* における Hester の大西洋を渡った後にふたたびボストンへ帰還することの意義を強調している。姦通の罪により異端となった Hester は、海を渡り帰還することでピューリタン社会を越えた輝かしいアメリカの未来を予示しうる存在となったと Bercovitch は主張する。同じように、*The Holder of the World* の主人公 Hannah Easton はピューリタン時代のセーラムからイングランド、そしてインドへ渡り、イスラム教の権力者の子供を身籠ったまま、セーラムへ舞い戻る。インド人の子供を産んだ女性として異端となった Hannah は Hester 同様、社会的弱者の味方として、自身の周りに調和的空間を生み出すのである。

本章では Mukherjee の同作品をインド系アメリカ人作家の手による *The Scarlet Letter* の再解釈として触れた上で、Lahiri の *The Lowland* もまた、その伝統の上に立つことを論ずる。注目すべきは、*The Scarlet Letter* が内包する二律背反である。序論である“The Custom-House” では絶え間ない移動こそが反映の礎となること説きながら、本編では Hester の帰還が示唆するように定住に比重が置かれている。移動と定住の二律背反を体現しているのが、*The Lowland* の Gauri である。物語は、カルカッタで生まれ育つ Subhash と Udayan の兄弟を主人公として展開する。しかしながら、本章では夫の Udayan が亡くなった後に、彼の兄である Subhash と再婚し、アメリカへ渡った Gauri を中心に作品を読み解く。彼女はカルカッタからアメリカ東海岸のロードアイランド州、そして西海岸のカリフォルニア州まで移動する。彼女の移動は、Paul Gilroy や James Clifford が提唱するような、根 (roots) よりも経路 (routes) にディアスポラのアイデンティティの所在を求める論では捉えることができないものである。なぜなら、彼女は移動をしつつも、その根を断ち切ることなく引きずり続けているからである。Gauri の移動を注意深く考察することで、roots か routes の選択ではなく、それらを同時に抱え込むインド系移民の在り方を分析する。

第四章は、Lahiri のエッセイ *In Other Words* について論じる。The *Lowland* を書き上げた Lahiri は、ローマへ移住した。本作品は、Lahiri が初めてイタリア語で執筆したものであり、外部翻訳者による英語訳が併記されていることが興味深い。そこにはイタリア語を習得するにあたっての思索や、英語との関わり方に関する葛藤を形にしたものである。彼女のイタリアへの関心は、彼女が学生時代にルネッサンス研究に従事していたことだけでなく、自身の作品内で繰り返しイタリアへ言及していることからもうかがえる。

特に *The Namesake* はイタリア文化への関心が散りばめられているが、それはあくまで観光者の視点から語られた幻想としてのイタリアに過ぎない。

幻想としてのイタリアは、*In Other Words* にも表象されている。この作品について Lahiri は「言語的自伝」という言葉で表現しているが、本章ではこれを、彼女自身を主人公とした創作作品として読み込む。同書でまず目を引くのは、左側のページにイタリア語、右側のページに英語という特異なフォーマットである。Lahiri は自身のイタリア語について権威 (authority) を持たないとした上で、その引き換えに「不完全になる自由」を手にしたと述べている。彼女が作家としての地位を築く不可欠なツールであった英語は、彼女にとってアメリカで生きるための押し付けられた言語であり、それは彼女に決して満たされることのない欠落の感覚をもたらした。一方、イタリア語は自由に扱うことはできず、権威をもつこともできないが、彼女が自主的に選んだ言語であるという点で、自ら選び取った不完全さを体現する。彼女は自身で英語に翻訳することができながらも、不完全なイタリア語が英語と混ざり合うことを嫌い、あえて第三者に翻訳を依頼し、二つの言語を並列させることを選んだ。

この二言語の並列こそが、Lahiri を作者 (author) としての権威の喪失を表象している。イタリア語はもちろんのこと、外部の翻訳者に依頼することで、英語にさえも権威を持たない状態は、Lahiri にとってどちらの言語も拠り所とはなりえない、いわば彼女の言語的な宙吊り状態であると考えられる。それにより、Lahiri は、Benjamin Franklin 以来のアメリカ文学の自伝における自己の在り方をずらしてみせる。すなわち、*In Other Words* は疑似自伝として読むことができるのである。本作品中には二つの短編小説が含まれているが、作品の登場人物と作者である Lahiri の境界が曖昧になり、作品の最後には、彼女自身が作品の主人公であると記すに至る。そして、創作物としての彼女が自身の起源であり宿命であると述べるのが、存在と不在の二律背反を示唆する虚無なのである。

結語では、2018年に『ニューヨーカー』誌に掲載された“The Boundary”に触れる。この作品はイタリア語で書かれ、Lahiri 自身の手により翻訳されたものである。しかしながら、Lahiri が自身で英語に翻訳したことは、原語であるイタリア語に権威がないことを思えば、かつて作家としての権威の拠り所であった英語に、彼女の存在と不在の両価性を刷り込む野心的な試みであると言える。

同作品では名もない土地で暮らす移民一家が描かれるが、「虚無の空間」への回帰が語られる。一方、従来の Lahiri 作品同様、留まることのない移動性が示唆される。それは、「虚無の空間」さえも打ち破ろうとする脱領域的な Lahiri 文学の展開を予示する。

Thesis Abstract

No. 2

flourish. However, while *The Scarlet Letter* demonstrates the importance of settlement, Gauri's movements exemplifies the ambivalence of perpetual movement.

In Chapter 4, I analyze *In Other Words*. Lahiri moved to Rome after writing *The Lowland*; the book concerns her life there and her thoughts about Italian, a new language for her. The work is remarkable because she wrote not in English, her predominant language, but in Italian, a radically foreign language. Originally published as *In altre parole* in Italy, its English translation does not simply stand alone; instead, the book juxtaposes the original Italian text with the English translation by an outside translator. Taking this experimental format into account, I consider Lahiri's ambivalent authority as a writer.